

「発想」の成立と展開

陳 贇

The Emergence and Development of the Term *Hassō* (発想)

CHEN Yun

Consisting of four chapters, this paper discusses the development of the phonetic term *hassō* (発想). The first chapter traces the root of the term and reveals that it was initially used as a musicological term. It can be found in classical Chinese to intend “to think a way for a purpose”. However, it is difficult to find similarity between the original meaning of *hassō* in Chinese and that in Japanese.

For another thing, the paper traces the changing process of *hassō* in which this initially musicological term was transformed into the literary term, promoted by writers in the end stage of Meiji era; such as *Iwano Hōmei* (岩野泡鳴). Moreover, the paper analyses the transition of its meaning from “representation” to “idea”, then to “way of thinking”.

In the final chapter, the actual utilization of *hassō* in Meiji Japanese and modern Chinese is observed. Furthermore, the transmission and adaptation of the vocabulary is evaluated through this particular term.

0 はじめに

現代日本語においては、「発想が良い」、「英語と日本語の発想が違う」、「発想を変えて問題解決を図る」のように「発想」は、“idea”、“conception”、“the way of thinking”といった意味に用いられている。また、現行の国語辞書には取り上げないものが無いほどに一般的な語として認識されている。

ところが、『言海』『ことばの泉』及び『辞林』などの明治時代の国語辞書には、「発想」は全く収録されていない。管見の範囲での「発想」の国語辞典への登録は、次に掲げる昭和初期のものである。

○はっ-さう 発想【名】〔音〕『英Expression』 楽曲に内在せる感じを表現するやうに演奏する技巧。楽曲の各節或は各音の緩急・強弱及び種種の奏法と、その奏法に伴なふ音色とは、最もこれに関係あり。(『日本大辞典 言泉』第4巻1927年)

○はっ-そう……さう〔発想〕(名)【音】(Expression) 楽曲のもつ情趣及び強弱緩急等を演奏において表現すること。(『辞苑』1930年)

○ハッソー 発想 expression 囿 囿 楽曲またはその一部に内在してゐる感情的内容を表現するように演奏する技巧。表情・表現ともいふ。(『大辞典』第20巻1936年)

ただしこれらは何れも音楽用語 expression に相当する意味の例であり、現代の一般的な用法とは異なるものであった。下って、『明解国語辞典』(初版1943年)には、

○はっ-そお①〔発想〕—サウ(名)⊖【音】 楽曲の持つ気分を演奏の緩急・強弱等であらはすこと。⊖思想を発表すること。

とあり(1952年の改訂版も同)、「思想を表すこと」という、音楽用語以外の項目が加わっている。一方、第二次大戦後にこれと同一編者・同一出版社(金田一京助・三省堂)によって刊行された『辞海』(初版1952年)を見ると、

○はっ-そお①—さう〔発想〕(名)○—思想を發し表わすこと。⊖【音】 曲想、曲の緩急強弱等を表現すること。

のように、掲出の順序が逆転している。さらに、『日本国語大辞典』(初版1975年)には、

○はっ-そう…サウ【発想】《名》①思想や詩情などを表現すること。②ある考えが浮かぶこと。思いつくこと。思いつき。…用例省略… ③音楽で、楽曲のもつ気分を的確に表現するための演奏の緩急や強弱など。

とあって、新たに②の意味が加わっている。

このような辞書記述の変遷から見ても、「発想」の意味用法が変化していることをうかがうことができる。

本稿では、「発想」の音楽用語としての生成原点に立ち返り、その一般用語への移行過程及びそれに伴う意味変遷を追跡する。さらに、稀ではあるが、中国語にも用いられた形跡を辿り、日中対象言語学的立場より考察を試みることにする。

1 二字漢語「発想」の生成

1-1 「発想」の原点

「発想」は字音語である以上、中国に原典を持つかどうか確認する必要がある。たとえば『漢語大詞典』には、「猶言発動心思」つまり、何か目的を達成するために手立てを思い巡らす意味の語として登録され、次のような清末小説の用例が掲げられている。

○〔餓殺鬼〕也曉得活鬼是個財主，只因螞蟻弗叮無縫磚階，不便去發想。（『何典』第二回）
一方、『漢籍全文資料庫』（台湾中央研究院）および『電子仏典集成CBETA』（中華電子仏典協会）による検索では、上掲のほかにも用例が確認できる。それは、

○朕以寡薄，猥纂洪緒。雖永念治道，志存昧旦，願言伝巖，発想宵寐（『新校本宋書・本紀』卷五「文帝」）

○因彼妄見。有妄習生。内分積情。外分発想。（『楞嚴經説約』卷一）

というものであり、第一例については、文脈からすれば「国策のためにいい方法を思い巡らせる」という意味で、『楞嚴經』のほうは「心動於内曰情。意縁於外曰想」という解釈の施されていることから分かるように、^{こころ}意が外側に現れることを「想」と言うわけである。『楞嚴經』の用例の場合、後に述べる音楽用語としての「発想」と同工異曲の趣が見られるが、前者は「自然に想いが表に出る」というのに対し、後者は「想いを表に出す」という動詞的意味の自他に異なりが存在する。また、二十五史を含むほぼ全分野のものを包含する『漢籍全文資料庫』と多くの仏典を包括するCBETAによる検索でそれぞれ一例しか見あたらないことから見れば、「発想」の中国における使用は恒久性を持たない臨時的な組み合わせによる語であった可能性の高いことを意味しているものと思われる¹⁾。

なお、早期の英華・華英辞典、明治時代の漢語辞典類及び支那語辞典類にも「発想」の項目は確認できず、現時点では、日本の音楽用語「発想」の生成に際して、中国語からの影響があったという可能性は考えにくいのである²⁾。

1-2 音楽用語としての「発想」の成立

管見の限りでは、日本において「発想」が見られるようになるのは次に掲げる明治20年代の音楽理論概説書におけるものである。

○今一曲の音楽を演奏するに方り、演奏者は善く作家の意匠を会得し、或は緩に、或は急に、或は強く、或は弱く、若しくは断へ、若しくは続き、若しくは続き、若しくは楽しく、畢竟するに、善く其楽曲の真想を発表するを要す。若しその真想を発表するを得ざれば

ば、音楽は或は其情味を減却するに至らん。されば、何とか一種の方法を設け、演奏者は其楽曲の真意を発見し、以て之を表彰せざんはあらず。製作者も又予め自己真意の存在する所は、楽譜に掲げ置くを善しとす。是故に音楽的表想musical expressionなる者の制定、頗る其必要を感じり。(鳥居忱『音楽理論』1891年・巻12-1「発想」pp.251-252)

この箇所の題目は「発想」であるが、本文中では「楽曲の真想を発表(する)」あるいは「音楽的表想musical expression」ということばが用いられている。これに関連するものとして、1891年発行の『音楽雑誌』第5号所収「高評・海南新聞」には、

○精神を清澄ならしめ随て高尚なる思想を發するに至る音楽の効能は何人も認め得るに至りし今日なれば…後略…

とあり、音楽の「思想を發する」効能について述べられている。

一方、1893年発行の『音楽雑誌』第31号に掲載されている神津専三郎訳「東京音楽学校校友会の景況」(1893年3月23日発行ジャパンデーリーメール新聞掲載記事の翻訳)には、

○…前略…猶唱者をして自ら言語の意義を領會するの快樂を享けしむるに至れり是れ其唱奏上に充分の發相を与へて余力を遺さざるは又疑ふべからざる事實なり。…中略…實際、唱歌に於て發相の程度は唱者よりは、寧ろ導師の使用する器械の如くにして唱歌の光彩も陰影も、唱者の集合意匠によるよりも、導師の指揮抑揚に属せりと謂ふべし。(p.3)

とあり、「發相」という表記が認められる。

その後、多梅雅『楽曲入門』(1900年)、田村虎蔵編『近世楽典教科書』(1901年)、新清次郎『小学校唱歌教授法』(1903年)、林重浩編『楽典教科書』(1903年)等をはじめとする音楽理論のテキストに「発想記号」ということばが散見されるようになり、また次の例のように、「発想」の重要性を詳述するものも見られる。

○この発想といふ事は、今でも余りに深き注意を払はれていないやうに思ひますが、これは大切なことであります、…中略…元來唱歌は感情の上に立脚地を持つて居るのですから快活な曲は快活らしく悲哀な曲は悲哀らしき心持でうたはなければなりません、其上強弱緩急等を附して上手に歌つたならば其曲の趣味をたすけ聴く人にも多大の感動を与へることになりますからこの一項は後來大に研究せねばなりません、そこで今教へんとする曲に作曲者が發想をつけて居ります場合は勿論それによらなければなりません、若作曲者がつけて居りません場合には演奏者自身の任意にやるより外に致し方ありません、…中略…前申述ました調子拍子の練習並に此發想との三事項は音楽の三要素と申しまして至極肝要の事ですから、深き注意を望みます。(大概貞一『如何に唱歌を教ふべきか』(1908年)・第6章「発想に注意する事」pp.16-17)

○楽曲の感じは十人十色である。一つの音楽と鑑賞者との間には、共通的なものがあるか。又は一つの音楽も聴手に依つて十人十色の感じを与えるものか。是等は誠に興味ある問題ではなからうか。そして此の問題は楽曲の発想に対する根本的解決を与えるものであり、延いては私達の唱歌教授に於ける発想の取扱ひ若しくは、その指導に暗示を与えるものであることを、信ずるのである。(北村久雄『音楽教育の新研究』(1926年)「楽曲と感情の関係及び発想指導」p.90)

なお上記第一例冒頭部分の記述によれば、明治後期の当時、音楽用語としての「発想」は余り重視されていなかったことがうかがわれる。

以上のように、「発想」は旧く「真想」すなわち「想い」を発表することであり、その初出は未確認であるが、「思想を発表」という句に基づく漢語的表現として、凡そ明治30年代初頭頃に成立したものと考えられる。なお、「思想を発表する」という表現は明治文献にしばしば認められ、雑誌『太陽』にも次のような例がある。

○吾人人類の意向思想を発表し、以て互に相倚り相扶くるの機関は種々ありと雖も、最も明確に最も普通に且最も至重なるものを求めば言語に如くものなし。(吉村銀次郎「国民の政治思想」1895年08号)

○唯だ二氏が其思想を発表するの文字に至りては、各々特色ありて一様ならず、(中西牛郎「文学界の遷流及文学者の寿命」1895年11号)

○彼は又一度は快樂以て唯一の権力とし、唯一の慰問とし、あらゆる悲観の側面を挙げて詩的観察に投じ何物の現象にも神の思想を発表せりとする汎神論的思想を有したりき、(龍山学人「宗教時評」1901年05号)

2 音楽用語から文芸用語へ——「発想」使用範囲の拡大

前節では、音楽用語としての「発想」の初期状態について記述した。しかし、前掲大槻貞一の言葉の如く、明治大正期における「発想」の使用は音楽の領域においてすらそれほどポピュラーとは言えなかったことがうかがわれる。また、『太陽』『明星』『女学雑誌』などのこの時期の主な雑誌、『読売』『朝日』『日日』などの主要な新聞、及び主な文学作品(新潮文庫CD-ROM『明治の文豪』『大正の文豪』による)を調べた結果、後にも触れる岩野泡鳴(1873-1920)の作品と有島武郎(1878-1923)の『惜しみなく愛を奪う』(1917年)における例以外に「発想」の用例は認められにくく、また、明治から昭和初期にかけての和英、英和辞典類などへの登録もごく稀であった³⁾。しかしながら、以下の例に見るように、この語は、明治末～大正期に、文学や文芸の世界においても使用が見られるようになっていったのである。

たとえば1915年の『井上英和大辞典』に、「芸術的作物又は音楽に於ける感情・性格等の表現」(“expression”の項)との語釈が見られ、当時の「発想」が必ずしも音楽用語にとどまらないものであったことが知られる。

これより先、岩野泡鳴による1906年の演説原稿には、

○概念的文芸でない以上は、言語も表象であれば、音響も表象だ。もし概念のような抽象物ではなく、直観的に世界を表出する為め、音楽を普通言語と云ふなら、同じ理由を以つて、表象的言語を普通音楽だと云へる。渠は音楽の普通的なるを証明するつもりでもあらう、一つの曲譜に種々の詩歌が当て填められることを云つて居る——これは、たとへば、わが国の長唄の様に、その発想法が緩慢であるので、叙情句でも、叙事句でも、勝手に当て填められる節もあると、田中博士の云はれたことがある、その意味なら、もつと厳密な発想法を用ゐれば、詩歌応用範囲が縮まるわけだが——然し、それも、五十歩百歩の違ひであつて、詩歌の方から云へば、矢張り同じことが云へよう(1906年2月11日鎌倉建長寺に於て開会せし国詩社集會席上の演説「新悲劇論——ショーペンハウエルの音楽論を破す」)⁴⁾。

のように音楽用語としての「発想」の使用が見られるが、その同じ文章中に、

○近頃少し気がきた批評家は、新体詩を見て、この行は詩的だが、かの節は散文的だなどと云つて、その詩全體の発想振りが見えない。(同上)

のように、文芸に関して「発想」を用いている。泡鳴は他の作品においても、

○発想法は、説明でなければ描写だとして見る。すると、如何に心的生活に関したのもども、説明でない具体的表現は、描写である。(岩野泡鳴『現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論』1918年)

○僕等は主義として、自分の云へないこと、乃ち、エキスプレス、発想し得ないことは、すべて価値のないものと信じてゐる。たとへ発想とサジェスト、乃ち、暗示と云ふこととは區別して見ても、暗示する物は、自分で神経で握つてゐるものでなければならぬ。(岩野泡鳴『憑き物』1918年)

のように音楽用語を離れたところで「エキスプレス express」と同義的に「発想」を用いているが、はじめに掲げた例からもうかがわれるように、それは音楽用語からの借用であった可能性がある。なお大正期には、泡鳴以外の文章中にも、様々な評論や文学批評類に「発想」の用例が確認できる。

○私の発想に就て——岩野泡鳴に答ふ(読売新聞1916年1月22日「読売文壇」野口米次郎)

○君はいつか『口語的発想』のことを云つたが、あれが一部分濁つて今度の歌に出て居る。(斎藤茂吉「釈迦空に與ふ」『アララギ』11-5;1918年5月)

○質に於て呪はれてゐる都会人なるわたしが、力の芸術運動に参加してゐる為に、あなた方の思ひもよられぬ苦悩を発想の上に積んでゐるといふことを知つて貰ひ、(折口信夫「茂吉への返事」『アララギ』11-6；1918年6月)

○但し作者は近頃の文壇の流行に背馳して誇大な発想や、活動写真的小細工にみちた脚色を厭ふ傾向から、無理にも主観的に説明的に流れるのを避け、強ひて平調な、殆ど紀行文に近い形式を採んだ。(水上瀧太郎「貝殻追放 向不見の強味」『三田文学』1918年10月)

○我我の子供は、我我の中での原始人である。彼等の生活はすべて本然と自然にしたがつて居る。されば子供たちは如何に歌ふか。彼等の無邪気な即興詩をみよ。子供等の詩的発想は、常に必ず一定の拍節正しき韻律の形式で歌はれる。(萩原朔太郎『青猫』1923年)

なお、萩原朔太郎は、上掲『青猫』の例の他にも、文芸に関して論じた『詩の原理』(1928年)において、

○詩に於ては、音律が重大の要素であり、それが殆ど詩的形式の骨組をすることは、前に既に述べた通りだ。しかし詩が音律を要求するのは、感情の強き表出を求めたため、必ずしも拍節形式のための要求ではない。もちろん、言語の発想はそれが「音」として響く限り、大体に於て音楽の原則に支配さるべく、必然に決定されているには違ひないが、所詮文学は文学である故に、言語が必ずしも音楽の規約と一致し、楽典の定める韻律の形式と、常に機械的に規則正しく符節するといふことは考へ得ない。(第六章「形式主義と自由主義」)

○そこで人間のすべての詩は、所詮この二つの感情の中、何れかを発想するものに外ならない。古来歴史上に於けるすべての詩は、これによつて情操の分類から、判然として二つの者に別れている。即ち前に他の章で言つたように、古代希臘の詩界に於ける、「叙事詩」と「抒情詩」との対立がこれである。(同上第七章「情緒と権力感情」)

のように「発想」を用いているが、特に、

○人間の発想の様式は、原則として三種しかない。「記述」と「説明」と、そして「表現」である。…中略…芸術は常に表現の様式で発想される。(同上第三章「描写と情象」)

の例では、「発想」は本来「記述」「説明」および「表現」を包摂する上位概念であるが、芸術においては「発想」すなわち「表現」という同義的關係が成り立つことを述べている。大正元年前後にドイツから日本に入った「表現主義」概念の登場と考え合わせると、別段不思議なことでもないかもしれない⁵⁾。このような「発想」≧「表現」という意識は、後の作家、たとえば太宰治の文章中にも、

○礼の思想は、微妙なものです。哲学ふうないひ方をすれば、愛の発想法です。人間の生活

の苦しみは、愛の表現の困難に尽きるといつてよいと思う。(太宰治『惜別』1943年)のように見いだすことができる。

3 「発想」における含意の多様化——意味変化の完成

3-1 多様化の実態

前節においては、音楽用語として成立した「発想」が岩野泡鳴などによって文学芸術の分野にまでその使用範囲が広げられつつも、その意味は、「表現」と類義的なものであったことについて述べた。一方、次のような例における「発想」の意味は、旧来の〈表現〉に相当する意味なのか、現行の一般的な〈思想〉や〈考え〉の意味にも通じうるものなのか、にわかには判断しがたい。

○身振りで他国の言語を覚えてゆくとか、物の大小の対比とか、さういふ発想法はガリヴァ全編のなかで繰返されてるます。この複雑な旅行記も、結局は五つか六つの回転する発想法に分類できさうです。(原民喜「ガリヴァ旅行記 K・Cに」『近代文学』1951年4月号)

また、

○映画をつくってみたいと思ったこともある。なぜなら、映画は小説とまったく方法のちがうものだから、いっぺん、つくってみたいくなるのだ。発想法も、表現の角度も、現実の捉え方も、全然ちがう。だから、時々、ひとつ、つくってみたいな、と思うのだ。(坂口安吾「我が人生観(三)私の役割」『新潮』47-8、1950年8月)

の場合も、現在の感覚で見れば、「発想法」が次の「表現」と類義的なのか否か、判別が困難である。さらに、同じ作者であっても、作品によって異なる意味に読み取れるものがある。例えば折口信夫は、『日本文章の発想法の起り』⁶⁾や『詩と散文との間を行く発想法』⁷⁾など書名にもしばしば「発想」を用いているが、その中には、

○漢字の勢力がまだわれへの発想法の骨髄まで沁み込んでゐなかつた、平安朝の語彙を見ても、われへの祖先が、どれ程緻密に表現する言語を有つてゐたかは、粗雑な、概括的な発想のほかすることの出来ない、現代の用語に慣された頭からは、想像のつかない程である。(折口信夫「古語の復活」、『アララギ』10-2、1917年2月)

のように、「表現」としての「発想」の例も見られるが、

○武蔵野は 今日^ナは 勿^や焼きそ。わか草^くの嫩芽^{ツマ}もこもれり、冬草まじり

こんな形にして見ると、発想展開の順序に見当がつく。(『古代民謡の研究・その外輪に沿うて』『日光』5-1、1927年9月)

○草刈る事を非難する表現に馴れた人々である。野を焼く^{にく}を悪む発想に到らないはずはな

い。(『古代民謡の研究・その外輪に沿うて』『日光』5-1、1927年9月)

のような例は、〈表現〉の意とも〈考え〉の意とも、何れにも解しうるように思われる。

同様に、坂口安吾の作品においても、例えば「作者の伝記や性格を調べて、発想法や構成法を知り」(「かげろふ談義——菱山修三へ——」『文体』2-1、1939年1月)の「発想」は、〈表現〉と〈考え〉のどちらなのか判別しがたいが、「論理の発想の根本が違っているから、信長という明快きまわる合理的な人間像を、その家来たちは、いつまでも正当に理解することができなかつたのである」(『織田信長』〈未完〉『作品』1、1948年8月)の「発想」には〈思惟〉や〈考え〉の意味が明確に認められる。

こうして見ると、〈表現〉としての「発想」が使用されるうちに、意味が多様化し、〈表現〉のみならず、〈考え〉や〈思い付き〉などの意味をも含むようになっていったのではないかと考えられる。

3-2 含意多様化の要因

以上見たように、本来音楽用語として作り出された「発想」は、感情を〈表現〉することを意味していた。すなわち、内面に秘めているものを表に現わすという、外的側面に重きを置くニュアンスを持つ語であったのである。それでは、それがなぜ、現在一般的用法である〈アイデア〉や〈考え〉といった、内的側面の思考活動の意味に変化したのであろうか。それに関しては、前掲の折口信夫や坂口安吾の文章中に、何れの意とも解しうる例の存在していたことが参照されるだろう。すなわち、筆者が例え本来の〈表現〉の意で「発想」を用いたとしても、それを読む側が〈考え〉の意に“誤読”することから、それが次第に定着したという可能性である。

例えば、与謝野寛『素描』の末尾部分には、「女」に子供がいることを聞かされた時の「おれ」の反応が次のように描かれている。

○おれは咄嗟に都合よく女の情緒の調子を合せるやうな発想を得なかつたので、間に合せてこんな平凡なことを故意とらしいアクサンで云つて、並の女と異らないやうな表情で嬉し相に其等の TOUTES CHOSES を見比べて居る女の顔をじつと見た。(『反響』1915年)

この「発想」は「故意とらしいアクサンで云つて」という文言からも分かるように、〈言い方〉や〈表現〉の意味と考えられる。ところが、現在の言語感覚からすると、「発想を得る」というのは、むしろ「アイデアを得る」ことを意味するようにも受け取れる。また、折口信夫の文章に、

○東歌には、語法・単語の上に、当時の都の言語の一時代前の俤を止めて居る。尠くとも真

の万葉集らしく見えて来る藤原宮時代のものよりは、古い形である。のみならず、其語法・言語で表現せられた東人の生活意識は、此亦一時代前の文化・思想を示して居、他の十九卷の歌と比べると、確かに直情風で素朴な発想を、張りつめた情熱を以て謡うて居る。(『万葉集の成りたち』『皇国』279、1922年2月)

とあるものも、「語法、言語」を受けた〈表現〉としての「発想」なのか、それとも、「生活意識」または「文化・思想」に立脚する〈アイディア〉、〈思考方式〉なのか、判別し難いものがあるように思われる。さらに、

○そのころ彼は、自分の思想が生まれる以前から存在してる言語でおのれを表現していたのだった。彼の感情は以前からでき上がってる発想の論理におとなしく服従していて、その論理が前もって彼に楽句の一部を口移しにしてくれ、公衆が待ち受けてる適宜な用語へ、開けた道を通して彼を従順に引き連れていってくれたのだった。(豊島与志雄訳(ロマン・ローラン原作)『ジャン・クリストフ』9「燃ゆる荊」1921年)

の例については、文脈に従えば、「発想」は前文の「言語」に対応するものと見ることもできれば、「思想」と呼応しているようにも見られる。おそらくはこのような例を“誤読”するところから、「発想」の語義変化、すなわち〈思いつき〉、〈考え〉の意が生じたものと考えられるのである。

また、「発想」の漢字表記もその意味変化に寄与しているのではないかと考えられる。「撥ね返す」という和語に対応する漢語表現として「反撥」という漢語が生成したものと考えられるが⁸⁾、それと同様の対応意識から、「発想」を和語「想い^た発つ」に対する漢語表現と見なす意識が生じた結果、〈思いつき〉〈考え方〉という意味が生じた可能性を考えることができる。その際、和語の「おもい」には〈感情〉(ハート)と〈考え〉(ヘッド)⁹⁾の二通りの意味が存在するが、「発想」の場合にも「想」すなわち〈おもい〉の意味として〈ハート〉と〈ヘッド〉の両面が存在しうるが、それが、少しずつ〈ヘッド〉つまり〈考え〉のほうに傾斜していった結果、語義変化が生じたものと考えられる。

さらに、「発想から表現への切りかへは瞬時に行はれる」¹⁰⁾と言われるように、〈内面で思考すること〉と〈思考の結果を表現すること〉とが連続した関係にある点にも語義変化の原因が求められるのではないかとと思われる。つまり、「想」そのものに重きを置くか、それを「発する」ことに重点を置くかによって「発想」の意味が変化するということである。

このように、意味の曖昧化、和語の影響、意味の中心の移動という諸要因によって、「発想」の意味は、〈感情や思想を表現する〉ことから次第に〈頭で考える〉の意味に変化したものと考えられることができる。

3-3 新義の成立とその時期

前項において筆者は、大正期の「発想」に〈思惟〉や〈考え方〉の意味が読み取れることを確認したが、それはあくまでも、現代の感覚によれば文脈上そのような解釈が可能であることを示したもので、依然として本来の〈表現〉の意にも解釈できるものであった。それに対し、

○日本の政治的記録に徴して、大東亜共栄圏の発想は、大東亜圏内における民族をして本然固有の姿に立還らしめ、和衷調同、共存共栄、国際的に隣保互助の実を挙げ、もつて世界大同の範を垂れんことを期し、万邦をして各その所を得せしむる存することは諸君の知る通りであろう、(『大阪毎日新聞』1943年3月29日「大東亜民族宣言」四「新秩序に生く」)*ルビ省略

○誰も判定のつきかねる所で、栖方はただ一人孤独な闘ひをつづけているやうだった。殊に、零点の置きどころを改革するといふやうな、いはば、既成の仮設や単一性を抹殺^{まっさつ}していく、無謀さには、今さら誰も応じるわけにはいくまいと思はれる。しかし、すでに、それだけでも栖方の発想には天才の資格があつた。二十一歳の青年で、零の置きどころに意識をさし入れたといふことは、あらゆる既成の觀念に疑問を抱いた証拠であつた。…中略…それで、電車の火と、ラジオのぼつといつただけの音とを結びつけてみて、考へ出したのですよ。それが僕の光線です。」この発想も非凡だった。(横光利一『微笑』1948年)

○こんにちの日本の社会では、現代人の発想として、さまざまな具体的な試みが活潑に実行されてこそ結構な時期である。(宮本百合子「人間性・政治・文学(1)——いかに生きるかの問題——」『文学』1951年1月)

などの「発想」は何れも原義の〈表現〉の意味ではなく、新義すなわち〈思いつき〉や〈考え方〉に相当する意味に解釈するほかないものと考えられる¹¹⁾。管見の範囲では、上掲のような新義にしか解釈し得ない「発想」は1940年代辺りから認められるが、これは前述のような、意味解釈のゆれの生じうる大正期の「発想」の用法を経て、いわば“誤解”に基づく「発想」の新義がこの時期に目立つようになってきたことを示すものといえることができるだろう。

3-4 新旧義の逆転

ここまでに見た「発想」の例は、新義と旧義のいずれについても、文芸や評論などの分野に限られるもので、かつては一般の日常語としてはほとんど用いられていなかったようである。それはたとえば、国会会議録(帝国議会録を含む)や『読売』『朝日』『毎日』の三大新聞に見られる用例が僅少であることから窺える。そして、このような状況は1950年頃になってようやく変化し始めるのである。

○座談会というものは、不用意のうちにもらす感情や考え方にむしろおもしろさがあるので

ある。速記のまちがいや意味の不十分なところは補正するとしても、完膚なきまでに直す位なら、はじめから筆談にした方がましである。それに□き変えなかった者の発言は脈絡を失うし、文章的発想の間に挟まれば、会話的発想の不便がばかばかしくなって直したくない人まで治すことになってしまう。(『読売新聞』1951年7月9日朝刊「[東西南北] 座談会と匿名批評」)*□は判読不能

この例は本来の〈表現〉の意であり、その後も、1958年9月11日付読売夕刊「話の広場」に掲載された田中千禾夫の「歌わぬ詩人」に見られる、

○詩的発想とは私の場合、何もこと新しいことではなく、感情や観念を整理し抽象し、こんな言葉は使いたくないが純化した上で、それを一番易しくまた願うらくは弾力性のある言葉で平俗化するという位のことに過ぎない。

のように、本義での使用例が一例のみ存在するが、1956年9月29日付け読売夕刊「随想」欄に掲載された福原麟太郎の「発想法」における、

○ことに面白かったのは、その発想で、いつでも、個体的実存としての自己というようなものを踏まえて、社会批評にも及ぶ、という方法は、もう私などにはできなくなっている。

の用例や1959年4月16付けの読売夕刊「展覧会週評」の「新しい材質の発想 グループ「JUNE」8回展」という評論における、

○作品を壁の一部とみなす発想

の例などは、新義の〈考え方〉、〈考え〉に相当する意味の例である。このほか、

○原爆症、世界に訴う 別府にも治療センター 赤十字発想百周年 デュナンの精神を記念
(『朝日新聞』1959年1月7日朝刊「医事・衛生」欄)

○首相“アジアの発想”をねる(1962年9月17日付けの朝刊「記者席」欄)

○翻訳に悩む異質の発想(1966年5月31日付けの夕刊「研究ノート」欄)

などの「発想」も、やはり新義の例と認められる。また、国会会議録における初出例の、

○やはり戦後十数年たって今までのマンネリズムに陥っているところの建設行政というものを、ベテランであるあなたが就任されて、一応反省し、検討し、実際に国民が求めているものは何かということをおあなたが発言され、あなたが発想されることを期待しているのであります。(1959年7月9日参議院建設委員会閉1号、田中一議員)

という例も明らかに〈考え〉、〈思いつき〉に相当する意味と考えられる。

このように、新義の「発想」のマスメディアへの登場は1950年代末ころからと見られ、およそこの時期に、新しい意味を持った「発想」が文芸界から一般語へと使用範囲を拡大したものと考えられる。そして、管見の限りでは、それ以降に出現する「発想」に〈表現〉の意味がほ

とんど認められなくなる。実際、和英辞典類の記載もその事実を物語っている。例えば、研究社『新和英大辞典』（初版1918年）には「発想」が収録されず、同書2版（1931年）には、

○hassō（発想）n. 《音》Expression

とあり、1954年の三版においては、

○hassō（発想）n. 《音》expression. [思想] conception

とあって「思想」の語積が付け加えられている。さらに1963年出版の『新和英中辞典』では、

○hassō発想 [着想] conception. ¶ 発想記号《音楽》an expression mark.

のように順序が逆転している。このような記載の変化から、1960年前後には「発想」の新義が原義よりも広く用いられていたことがうかがわれるのである。

一方、国語辞典では、『岩波国語辞典』（初版1963年）に次のように語積が施されている。

○発想：【名・ス自他】①思いつくこと。思いつき。「いいーだ」②心に起こった考えが展開して形をとること。「一法」③音楽で、曲の気分・緩急・強弱などを演奏で表現すること。

しかし、そのほかの国語辞典類における「発想」新義の登録は、1970年代になってからのことである。例えば、『新明解国語辞典』（初版1972年）、『三省堂国語辞典』（第二版1974年）、『新選国語辞典』（改訂新版1971年）などに登録が見られる。『広辞苑』に至っては、1983年の第三版まで待たねばならなかった。

なお、国会会議録における、1959年以降5年ごとの「発想」の使用状況は以下の通りである。

1959.7.9～1964.7.9	83件
1964.7.10～1969.7.9	594件
1969.7.10～1974.7.9	1812件
1974.7.10～1979.7.9	1733件
1979.7.10～1984.7.9	1603件
1984.7.10～1989.7.9	1499件
1989.7.10～1994.7.9	1495件
1994.7.10～1999.7.9	1752件
1999.7.10～2004.7.9	2175件

これらの例は何れも〈思いつき〉〈考え〉という新義の例であり、これによれば1959年から1974年までの間に、新義の「発想」使用は爆発的に増加したことが読み取れ、国語辞典類における語積の変遷とも一致する。

そしてこのように新義の「発想」が広く認知された結果生じた現象として、次のような例も見られる。

○一体政府の力で米価を適当に決定し、以て需用供給を巧みに適合せしめ得ると考へるのは、所謂政府万能の思想に捉はれたものである。(『大阪朝日新聞』1912年7月27日、戸田海市「腐敗の極なる現米穀取引所(七)」)

この記事の「思想」について、神戸大学電子図書館記事検索文庫のHTML版による該当箇所には「発想」と表示されている。この部分が「思想」であることは、関西大学所蔵の同紙によって確認できるが、神戸大学所蔵紙の画像データによれば、旧字体の「發想」の「發」の文字がかすれてよく見えない状態であり、おそらく整理者が文脈を踏まえた上で該当箇所を「発想」と判断したのではないかと考えられる。

このような現象が生じるのは、現在の言語感覚では「発想」は思想活動に関わるすべての現象に適用する便利な一般語彙であることに原因が求められるのではないかと考えられる。

4 中国語における発想

すでに述べたように、中国語における「発想」は古くその使用例が存するものの、必ずしも広く使用されたものとは考えられない。一方、近代の中国文献に〈考え〉の意の「発想」が見られるが、これは日本語の「発想」が受容されたものではないかと考えられる。本節では中国における「発想」の実態を踏まえた上で、中国語における和製漢語の受容の一側面を探ってみたい。

4-1 明治から昭和前期の情況

周知のように、明治時代に作り出された和製漢語は大量に中国に流れ込み、使用されていた¹²⁾。したがって、和製音楽用語の「発想」も、同様に中国語に取り入れられた可能性が考えられる。

日本の音楽用語の中国に与えた影響についてはこれまでもいくつかの論考で触れられている¹³⁾。特に、朱京偉(2003)には、明治、大正時代の留日学生による日本音楽教科書の中国語訳の経緯が詳細に述べられている。それによれば、1907年商務印書館から出版された『中学楽典教科書』(田村虎蔵原著、徐傳霖・孫揆訳)に「発想記号」が取り入れられていることがわかる(朱(2003) pp.194-195参照)。

また、豊子愷編著『音楽入門』(1948年)中編「楽譜的読法」第一章「譜表」のVに、「発想標語」という項目を掲げて、

○発想標語、是要發揮樂曲固有的趣味，使其感動益深而用的一種文字。(p.76)と説明している¹⁴⁾。

一方、日本とドイツ両国で音楽を学び、1920年帰国した音楽家の蕭友梅（1884-1940）は多くの音楽用語を新造したり、従来のものを改変したりしているが、「発想用語」についてもこれを「表情用語」と言い換えている¹⁵⁾。蕭によるこのような言い換えに関して、朱（2003）は「わざわざ日本製の訳語に対抗するために自らの訳語を押し出したというよりも、彼はドイツ留学が長年続いたので、その間に日本で新造された用語を知らず、自分で訳語を作らねばならなかったという事情もあったかと思われる。これと同時に、前述のように、音楽形式に関する用語が中国に移入されたのは、20年代中期ごろになってからのことなので、蕭氏が帰国して北京大学の『音楽雑誌』で論文を発表した時点では、日本製の用語がまだ移入されていなかった。」と述べているが¹⁶⁾、1902年から1909年までの8年間に亘る日本留学生活の中で、東京音楽学校の講義を傍聴し、かつ音楽に関する論文まで発表した経験を持つ蕭が日本における「発想記号」の存在を全く知らなかったとは考えられない。したがって、ここで敢えて「表情記号」に改めたのはやはり「発想」という言葉に違和感を覚えたからなのではないかと思われる。当時の中国語に“expression”の訳語としての「発想」が存在しなかったことは、同時代の英華辞典にその登録がほとんど見られないことからもうかがうことができる。管見では唯一、商務印書館の『綜合英漢大辞典』（1936年）に記載が認められるが、この辞書は斎藤秀三郎『英和中辞典』（1921年）等、日本の英和辞典からの影響を受けており¹⁷⁾、“expression”に対する「発想」の語積も、英和辞典の語積からの引用と考えられるのである。

辞書だけでなく、管見の限りでは、留日経験を持つ魯迅や周作人などによる文学作品における「発想」の使用も未見である¹⁸⁾。ただ、台湾の日本植民地統治時代に読まれた詩に次の例が認められる。

○林子下筆発想奇，新詞未就神先馳。（『寄鶴齋選集』詩選（中）七言古体・写山谷詩；幼春有贈、即次有韻『台湾文献叢刊』三〇四）¹⁹⁾

引用例中の「林子」は台湾の詩人林幼春（1880-1939）を示す。作者の洪棄生（1866-1928、本名攀桂、後に繻と改名）も台湾の著名な古体詩人で、この『選集』は清末から日本による植民地統治初期のことを詠んだ詩の集成であるが、同集「弁言」二によると、「七言古體」のはじめに「四十初度感賦」とあることから、前掲の詩も作者の四十歳ごろ、即ち1906年以降の作品となると推測される。また、作者による「跋」の日付が「丁巳」（1917年）となっているため、前出の詩は1906年～1917年の間に詠まれたことが分かる。したがって、この「発想」は日本語の影響を受けた可能性が高くなる。なお、この詩の文脈からすれば、“idea”としての意味が強く読み取れるが、その場合は、これを中国における日本語「発想」受容の初出例として位置づけるこ

とができるかもしれない。

しかしながら、明治から昭和前期にかけて「発想」は一旦中国に入ったものの、認知度が低く、日本の影響が強く認められる文献においてのみ使用されており、それ以上の拡大は認められない。その理由として、「発想」の〈「発」+思考を現す動詞〉という語構成が、中国語の構造に馴染まなかったことからではないかと考えられる²⁰⁾。

4-2 現代中国語における「発想」

現代中国語においては、例えば、

○大前已經62歲了，他的商業發想力絲毫不曾減弱。（『我的發想術』台湾聯經出版社2006年<http://www.books.com.tw/exep/prod/booksfile.php?item=0010340544>）*大前研一『私はこうして発想する』（2005年）の紹介文

○有時候搜索引擎也在通過自己力所能及的手段來幫助用戶發想更合理的關鍵詞。

（「用戶的發想」<http://www.sina.com.cn> 2008年04月11日 10:34 <http://www.ciweekly.com/>）

など、台湾・中国を問わず“idea”の意味で「発想」が用いられている。また、2004年10月23日に台湾政治大学で開催されたシンポジウムには、「第一回創意的發想与实践検討会」（www.wenkoo.cn/wendang/chuangyi-shijian-1212）というテーマが掲げられている。この例からもわかるように、台湾における「発想」は個人範囲のレベルではなく、相当に一般性を持つ語として使用されている。

一方、中国の場合にも近年その使用が目立つようになっているが、その使用範囲はインターネットや広告等の分野に限定されているようであり、これはむしろ台湾からの影響とも考えられる²¹⁾。

5 終わりに

以上、本稿では「発想」の成立経緯とその後の展開について考察した。その梗概は以下の通りである。

明治時代に音楽用語として日本で成立した「発想」が文芸用語として転用され、次第に「表現」の意味から“idea”といった思考活動を現す意味を兼有するようになり、現在では、後者のほうが圧倒的に周知されている過程を確認した。

一方、明治後期の留日中国人学生より「発想」は一旦中国に紹介されたものの、種々の原因で定着しなかった。ところが、近年になって、日本において独自の意味変化を成し遂げた“idea”意の「発想」が、台湾を中心にある種流行語的な使用の拡大を見せつつある。

なお、今回は明治大正期に相当する民国初期の「発想」がなぜ中国語に溶け込めなかったかについて深く追求することができなかったが、このようにかつて一旦日本語から中国語に受容されたもののその後はあまり使用されず、近年になって新たに使用の拡大が見られるという現象は、旧稿で考察した「反撥」の場合と類似性を持つものと考えられる。今後はこのような歴史的展開を持つ一連の語群の搜索・考察を行い、その背後に潜む時代背景及び言語そのものの本質的な特徴を探っていききたい。

注

1) 『漢籍電子文献』における「発想」はもう一例あったが、1900年以降の台湾詩人によって使用されたもので、日本の音楽用語としての「発想」の生成に影響が認められないため、第4節の「中国における「発想」」で検討することにした。なお、仏典には、ほかにも「発想念」（『法文譬喻経』巻四）、「言発想信者」（『仁王護国般若経疏』巻三）などの使用例が存在するが、「想いを発する」という意味は認め難い。

2) 筆者の調査した辞典は次の通りである。

華英、英華辞典：、『華英字典』（1823年）、『英華韻府階階』（1844年）、『英漢字典』（1847年）、『英華萃林韻府』（1872年）、『英華字典』（1873年）、『英華学芸詞林』（1880年）、顔惠慶『英華大辞典』（小字本1908年）

漢語辞典：『新令字解』（1868年）、『新令字弁』（1868年）、『漢語字類』（1869年）、『漢語字類』（1869年）、『漢語便覧』（1869年）、『増補新令字解』（1870年）『大全漢語解』（1871年）、『日誌画引新令字類』（1871年）、『新撰字解』（1872年）、『布令字弁』（1872年）、『布令字辨』（1872年）、『広益熟字典』（1874年）、『布令必用大增補新撰字引』（1874年）、『増補漢語字引大全』（1875年）、『改正増字画引漢語字典』（1877年）、『御布令新聞漢語必要文明いろは字引』（1877年）

支那語辞典：『注音対訳華語辞典』（1931年）、『尚文堂ポケット支那語辞典』（1932年）、『華語大辞典』（1933年）、『井上ポケット支那語辞典』（1935年）、『最新支那語大辞典』（1935年）、『支那語新辞典』（1941年）

なお、朱鳳「西洋楽理伝来における『律呂正義』続編の役割と影響」（『或問』11、2006年6月）において、中国在住の宣教師の妻である狄就裂による『西国楽法啓蒙』（1872年）が明治初期の日本における音楽訳語の制定に影響を与えたとしているが、同書には「発想」が見いだせなかった。なお、同書に音楽の果たす役割について次のような問答が見られる。

問 ○楽有什麼用処呢

答 ○無論は喜樂の心、是悲哀の心、樂又好表明、又好発動、若用他歌聖詩、更能触動感恩和悔改の心。
（上巻一頁）

すなわち、喜ぶ気持ちであれ、悲しむ気持ちであれ、みな樂を通じて「表明」または「発動」することができるというわけである。この二つの言葉が「発想」に最も近いように思われるが、「発想」との関連性は認めにくいと考えられる。

3) 管見では、下記の英和、和英辞典には「発想」が収録されていなかった。

英和：『哲学字彙』（1871年）、『改訂増補哲学字彙』（1874年）、『英華和訳字典』（1879年）、『An English-Japanese Dictionary of The Spoken Language』（1879年）、『英和双解字典』（1887年）、『増補訂正和訳英字彙』（1892年）、『新編英和辞典』（1902年）、『詳解英和辞典』（1912年）

和英：『和英語林集成』（初版1867年、再版1872年、改正増補1886年）、プリンクリ『和英大辞典』（1896年）、佐久間信恭『和英大辞林』（1909年）、武信由太郎『和英大辞典』（1919年）、竹原常太『スタンダード和英大辞典』（1924年）、斎藤秀三郎『和英大辞典』（1928年）、三省堂『新訳和英辞典』（1929年）

さらに、1924年出版の『音楽解説字典』（No. 6 音楽講話叢書、白眉出版社）や「本書は、漢字英語中の死語廃語を除き、日常慣用の語辞と最近流行の新語中比較確実性を有するものを蒐集網羅せる漢英共通の字典なり」（凡例参照）と標榜する小島茂雄編の『新案記憶式和漢英活用字典』（1920年）にも登録されてなかった。

「発想」を登録する早い例は井上十吉『和英大辞典』（1920）におけるものである。そのほか、岡倉由三郎『新英和大辞典』（1926年）及び『センチュリー英和辞典』（1933年）に登録が確認される。

- 4) 岩野泡鳴『神秘的半獣主義』（1906年）所収
- 5) この「表現主義」については『辞苑』（1935年）の「Expressionism」項目及び神林恒道『美学事始』（2002年p.134）を参照されたい。
- 6) 『古代研究』第二部「国文学篇」1929年4月参照。
- 7) 『改造』12-2、1930年2月参照。
- 8) 「反撥」については、陳贇「關於『反撥』」（中日研究生国際論壇2007『漢語漢文化論叢』2007年、pp.51-65）を参照。
- 9) この「ハート」と「ヘッド」の言い方は萩原朔太郎『詩の原理』第四章「叙事詩と抒情詩」（1929年p.192）を参照されたい。
- 10) 扇畑忠雄「発想と表現—『君を心に持ちて』その他—」、『沢瀉博士喜寿記念 万葉学論叢』1966年pp.1-2を参照されたい。
- 11) 「発想」の意味合いは「思いつき」や「考え方」、「着想」などいろいろ含むが、具体的には大島中正「『発想』はどんな概念を表示する命名単位か」（『国語語彙史の研究』十九1999年）を参照されたい。
- 12) これらの研究に関しては、沈国威『『新爾雅』とその語彙 研究・索引・影印本付』（1995年）、沈国威『近代日中語彙交流史 新漢語の生成と受容』（2008年）、朱京偉『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に——』（2003年）などを参照されたい。
- 13) 詳しくは羅傳開『中国日本近現代音楽上音楽史上的平行現象（序論）』（『音楽研究』1987年第三期pp.26-35）、魯松齡『日本輸入西洋音楽三部曲—鎖国、開放と反思』（『音楽研究』1987年第三期pp.36-41）、王耀華『中国音楽的跨文化比較研究』（『中国音楽学』〈季刊〉、1993年第一期pp.13-26）、宮宏宇「伊沢修二、文部省、唱歌、明治維新、西洋音楽——艾濞斯坦『明治時期西洋音楽在日本之發軔』述評」（『黄鐘』2006年第4期、pp.138-141）などを参照されたい。
- 14) 引用は『民国叢書』第一編・69・「美学・芸術」類による。
- 15) 朱京偉『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に——』（2003年）pp.199-200を参照
- 16) 同注15 p.200。
- 17) 『綜合英漢大辞典』編輯大綱（ix）参照。
- 18) 『現代文学全文検索叢書・魯迅全集』（凱希メディアサービス）と鍾叔河編『周作人文類編』1-10（1998年）を参照。
- 19) 引用は台湾文献資料叢刊第八輯『寄鶴齋選集』（全）p.282による。
- 20) 例えば、中国語には「発+思」→「発思」、「発+考」→「発考」、「発+案」→「発案」（日本語では成立する）などの組み合わせは成立しない。なお、『漢語大詞典』には「発念」と「発意」は収録されているが、前者は宋まで、後者は（中国）南北朝時代の例しか挙がっておらず、いわゆる死語であり、現代中国語の語彙としては認められにくいものである。但し、これについてはさらに深く考察せねばならず、今後の調査に期したい。
- 21) 近年、「素顔」、「華麗轉身」、「必殺技」といった、日本語出自で台湾にそのまま受容された言葉が娯楽番組や雑誌などのメディアを通じて中国に入っている現象が注目を集めている。具体的には、郭伏良「從

人民網日本版看当代漢語中的日語借詞」(『漢語學習』2002年第5期、延辺大学) 万紅『当代漢語的社會語言學觀照——外來詞進入漢語的第三次高潮和港台詞語的北上』(2007年)、王敏東・陳盈如「日本の流行語の台湾での使用状況——戦後の漢字表記語を中心に——」(関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ6 沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有——』2008年)などを参照されたい。

参考文献

- 広田栄太郎『近代訳語考』東京堂出版、1969.8
柳父 章『翻訳語成立事情』岩波書店、1982.4
佐藤喜代治(講座日本語の語彙)『語誌』(I・II)明治書院、1983.1・1983.4
樺島忠夫他編『明治大正新語俗語辞典』東京堂出版、1984.5
惣郷正明他編『明治のことば辞典』東京堂出版、1986.12
荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』白帝社、1997.10
陳 力衛『和製漢語の形成とその展開』汲古書院、2001.1
内田慶市『近代における東西言語接触の研究』関西大学出版社、2001.10
松浦章・沈国威・内田慶市編著『遐邇貫珍の研究』関西大学出版社、2004.1